

江副文法の基礎知識

1. 文の構造について

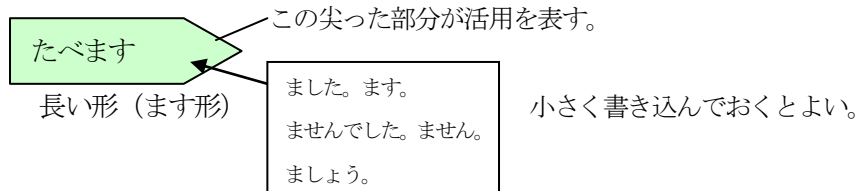
(1) 情報と述部

- ことばで何かを伝えようとするとき、最も言いたいことは「述部」に来る。

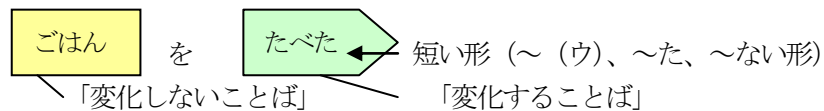
例1：「食べちゃったよ、もう。」「行ったの、映画？ おもしろかった？」

- 「述部」には、①時制 (過去・現在・未来・進行・完了など)、②肯定/否定 (ます・です/ません・ではありませんなど)、③意志・意向 (ましょう、～たいなど) が入っている。

- 「述部」は上記のことを表すために様々に活用する。これを江副文法では「**動くことば**」と称している。(注→子どもには「動くことば」は、そのことばの意味、例えば「食べる」であれば食べる行為 (=ことばの意味内容) を表す「動詞」に用いるので、活用によって形態が変わることを表すには「**変わることば・変化することば**」のほうがわかりやすいだろう。これなら述部を構成する形容詞にも使える)



- 関連①→「変化することば」に対して、名詞や副詞などには「**変化しないことば**」を用いたい。



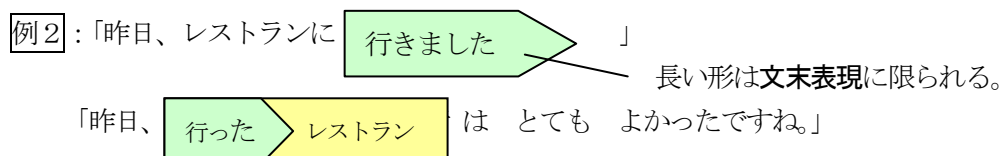
- 関連②→「です・ます形」を「**丁寧形・敬体**」、「だ・～(ウ)形」を「**普通形・常体**」と言うが、後者は、本当は「**完了**」の意味なので、上記の言い方は用いないようにしたほうがよい。

例：「家を 出ました時に メールしました」とは言わない。

→「家を 出た時に メールしました」 「明日、家を 出る時に メールします」

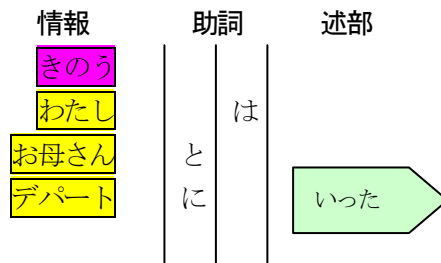
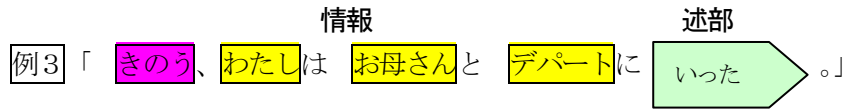
そこで、江副文法では、「～ます」の動詞、「～です」の形容詞には「**長い形**」、
言い切りの「～(ウ)、～た」の動詞、「～(イ)、～た」の形容詞は「**短い形**」と言っている。

- 上記の例のように「短い形」は文末だけに用いられるわけではない。「短い形」が前に来ると、すでに変化しているので助詞はいらなくなり修飾のかたちになる。文型はない。



(2) 英語と日本語の違い

- 日本語と英語は文法の構造が基本的に違う。日本語は情報が前に来て、述部が後ろに来る構造。その関係を示すために助詞が来る。助詞は情報の後ろに置く後置詞。英語は情報の前に置く前置詞。主語と述部は一体になっていて述部と主語とは切り離せない構造。日本語は、主語とは一体になっていない。情報はどこに配置されてもかまわない構造で、「開放文法」である。言いたい情報だけを取り出して言うこともできる。



「きのう、行った」「お母さんと行った」「デパートに行った」など、伝えたいところだけ取り出して言うことができる。その分、わかりにくいことも起こる。

例4：「明日 いらっしゃいますか？」→言いたい所だけ取り出した文だが、意味が幾通りにもなる。①「明日、行くのですか？」②「明日、(家に) いますか？」③「明日、どなたか 来ますか？」→だから、情報を付け加える必要がある。

例5：「と」の用法→ダブルミーニング 「太郎と花子が結婚した」→「太郎と花子が一緒になった(結婚した)」のか「太郎と花子が、それぞれ別の人と結婚した」のかわからない。こういう場合は、情報を付け加えるか誤解の生じない言い方に変えるしかない。

- 英語では主語と述部とは人称変化で関係しているので切り離せない。英語は「閉塞文法」で、文型が決まっているので、主語が来れば自動的に次に来るものが決まってくる。しかし、日本語は「開放文法」なので次のような文が延々と作れる。→(注)こうなるとどこがどうつながっているのかわからなくなり、聞こえない子には理解できない構文になる。

例6：「テレビで見た人が言った話を聞いた人が言っていた…」

テレビで 見た
 見た人が 言った *述部と修飾が延々と繰り返される。
 言った話を 聞いた
 聞いた人が 言っていた…。

- 日本語は、英語のような自動詞・他動詞はない。他動詞とは、一般に他に力を加える時の動詞のことを言っている。例えば「ドアを 開ける」は他動詞。「ドアが 開く」は自動詞としている。しかし、力を加えてドアを押しながら、私たちは「このドア、開くよ」と言ったりする。

2. 指導の順序

(1) 時数詞…時間や数量をあらわす名詞。1列目の助詞を省略できる。

文の指導に入る前の段階で、一日の時間の流れに沿って、時数詞の練習から入るとよい。

- ①「朝、昼、晩、夜」→ これに対応して「おはよう、こんにちは、こんばんは、おやすみ」
「朝ごはん、昼ごはん、晩ごはん」を教える。（*教材：お日様カード）

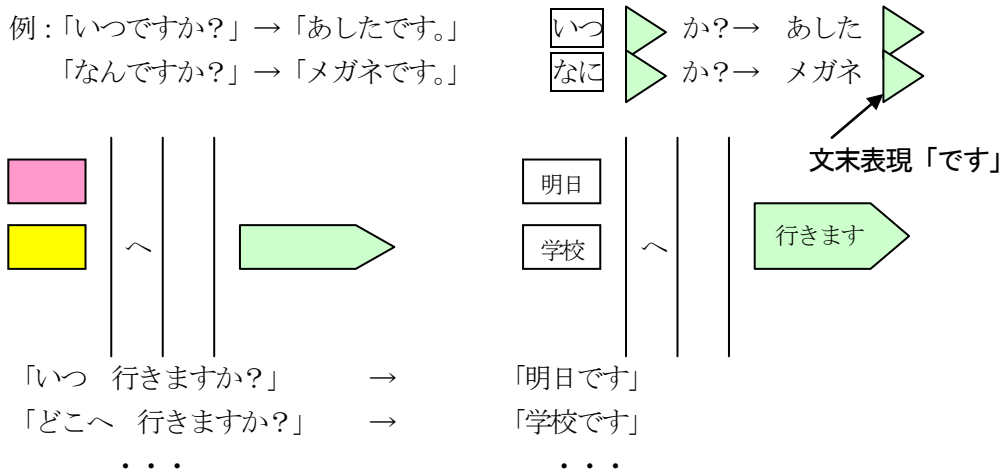
②「今日、明日、あさって、昨日、おととい、毎日、いつ」

英語は数詞が少ないが、日本語は多い。何本、何日、何冊…

日本語は、情報だけを部分的に取り出して会話ができる。いわば「情報文法」

例：「いつですか？」→「あしたです。」

「なんですか？」→「メガネです。」



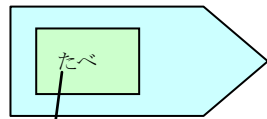
この基本の構造を何度も学習する。情報はどんどん増やすことができる。横に書いていくと長い文になるが、このように構造化するとそれほどでもなく、わかりやすい。

(2) 動詞の練習

①動詞カードを使って、動詞の活用を教える。

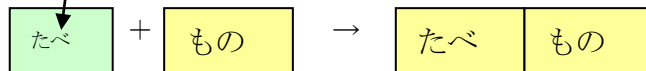
長い形…「食べます、食べました、食べません、食べませんでした。食べましょう」

短い形…「食べる、食べた、食べない、食べなかった、食べよう」



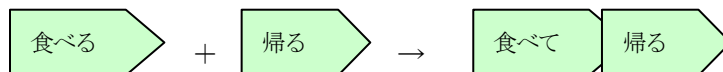
②語幹カードを使って 「食べ (語幹) +もの」で名詞が作れることを教える。

例：食べ物 着物 飲み物



このように日本語は、動詞から名詞が作られる。

③「て形」の教え形…「動詞+動詞」→「て形」になる。



3. 助詞の指導

①導入 まず「に、で、を」のセットで、アクションを使って教えるとわかりやすい。

例7：「学校に 行きます」→「学校で 勉強します」→「学校を 出ます」

しかし、「出る」は使い方としてちょっと特殊。

「クラスを出る」は、出ちゃうし、「クラスに出る」は入っちゃう。

②助詞の指導

- ・ 今日、授業で使っていた**助詞記号**を用いた方法は、助詞の用法を教える上でよいかもしれない。
- ・ 1列目の助詞は、情報と述部の関係を、2列目の助詞は、情報と情報の関係を行っている。
- ・ 「は」は一つの選択。「きょうは 金曜日です。」
「ぼくは 富士山が 見える。」→他の人は見えない時しか使わない。
- ・ 「も」は二つの選択。「～でも」は条件選択。
- ・ 「さえ」は比較選択。「だって」は「も」などの代用。
- ・ 1列目と2列目の助詞は入れ替わらない。
- ・ 「が」は情報につく助詞。単独。「富士山が 見える」は情報についてだけ言っている。
- ・ 小出しにしない。全貌を見せておいて、今日はここをやるんだよとやる。
- ・ 「主語」ということばを使うと混乱する。
- ・ 動詞を変化させる主体。主語は1つにきまっている。
- ・ 「バスに 間に合わなかった」「バスには 間に合わなかった」→「は」は選択
- ・ 1列目の助詞は、句を構成できる。
「子どもにだけ あげる」「子どもだけ に あげる」

③「なにで名詞」＝形容動詞

- ・ 「安全」の品詞はなに？ときくと、たいていの人は「名詞」と応える。
「安全な食品」→名詞が接続 「安全に渡る」→動詞が接続
「安全で丈夫な」→修飾がくる名詞グループ
「安全な」の「な」は、「なる」の省略でこれが動詞の活用と同じかたち。

4. 接続のまぎらわしいことばの指導

(1)「から」(いわゆる格助詞)

- ①理由 「たべた から おなかを こわした」
- ②順番 「たべて から あそびに 行きましょう」
- ③起点 「日本から 飛び立ちます」
- ④範囲 「9時から 10時まで」

(2)「そう」

- ①他の人から聞いたときの「そう」 「おいしいそうです」
- ②見たとき、思ったときの「そう」 「おいしそうです」